

History of 200 years in Samani

ふるさと様似・200年のあゆみ

年号	西暦	できごと
寛永12	1635	運別(今の海辺川→うんべがわ)の支流ボロナイの水源に金鉱を発見し、採金をはじめた (東金山金山→ひがしおんなやまきんざん)
寛文9	1669	シャクシャインの乱で、東金山の鉱山閉鎖。川口に近いキリシタナイの集落がしだいにおとろえる
寛政11	1799	エンルムに会所を設ける 様似山道(約7km)と猿留山道完成
寛政12	1800	高田屋嘉兵衛の辰悦丸ほか様似に寄航
文化3	1806	オコタヌシ(栄町)に等澍院を完成。7日間勧請供養 等澍院初代住職 秀曉が百人浜に一石一字塔(いっせきいちじとう)を建立(碑文は秀曉の筆で現存)
文化8	1811	等澍院護摩堂、7月に竣工
文政4	1821	等澍院、ソビラウドルサンナイ(本町)に移転
明治8	1875	様似郵便局開局 様似神社が郷社となり、住吉神社として発足
明治18	1885	等澍院、廃寺となる
明治21	1888	公立様似簡易小学校開校
明治22	1889	様似簡易小学校の冬島、誓内(ちかない)文教場開校 石川県の移民 海辺(うんべ)に入る
明治24	1891	様似簡易小学校の鶴苦、岡二文教場開校
明治30	1897	等澍院再興許可、塚田純田が住職となる
明治38	1905	様似村役場庁舎 潮見台に新築
大正9	1920	様似尋常高等小学校鶴苦文教場開校
大正14	1925	はじめて電灯がつく(浦河から送電 278戸に点灯)
昭和8	1933	様似村是制定
昭和12	1937	日高本線、様似まで全線開通。様似、西様似、鶴苦各駅開設
昭和22	1947	様似中学校開校(鶴苦、冬島、幌満分校)
昭和24	1949	浦河高等学校様似分校設置
昭和27	1952	町制施行(村から町になる) アポイ岳高山植物群落 国の特別天然記念物に指定される
昭和37	1962	様似町史発刊
平成17	2005	等澍院古文書ほか蝦夷三官寺資料 国の重要文化財に指定される

様似郷土館

〒058-0024 様似郡様似町会所町1番地 (0146) 36-3335

様似町教育委員会

〒058-0014 様似郡様似町大通1丁目21番地 (0146) 36-2521



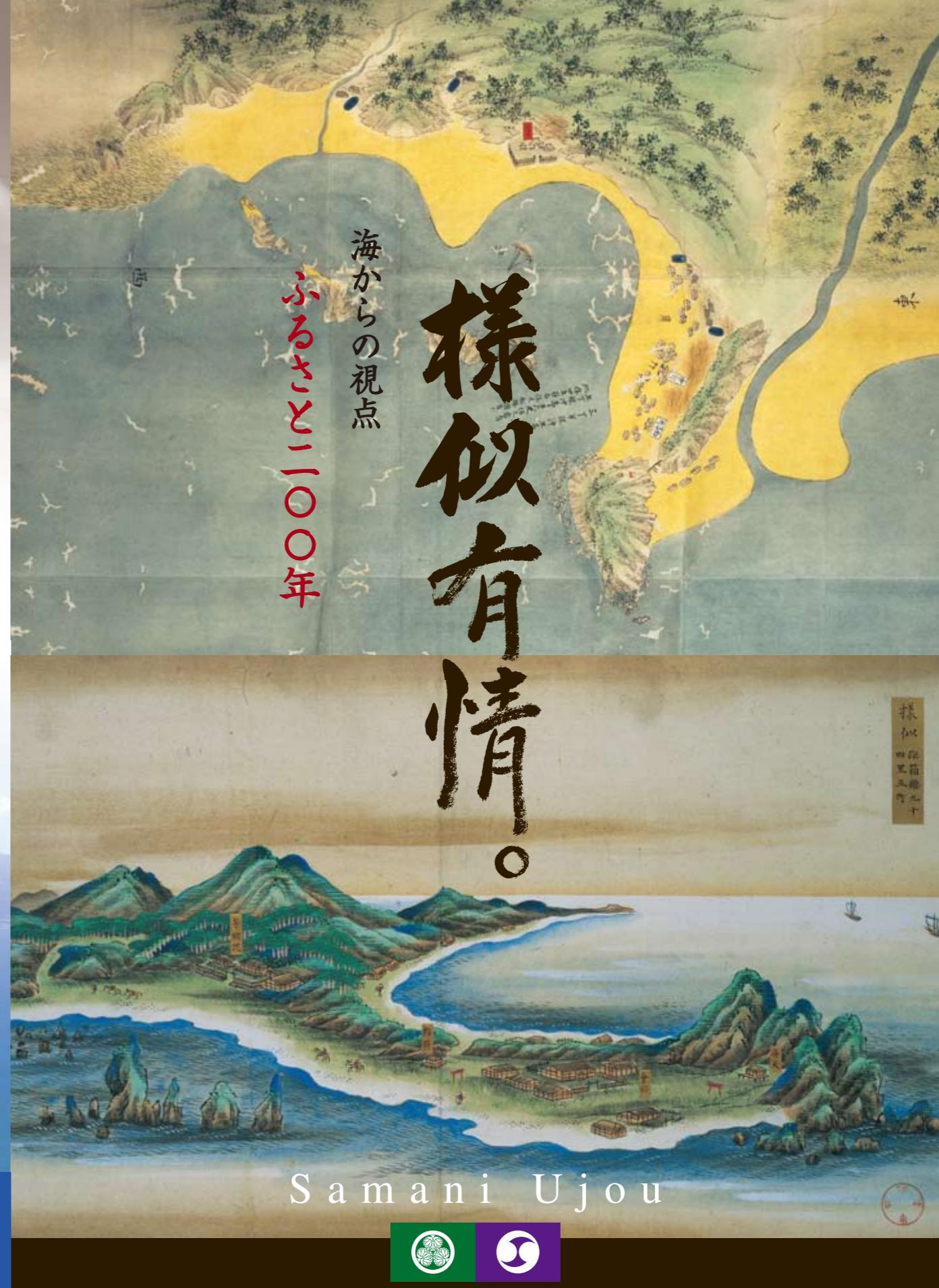
日本財団
The Nippon Foundation
助成事業

■パンフレット内のイラスト／ひらかわしょうじろう

■表紙上図 「仙台藩東蝦夷地経営図の内シャマニ」市立函館図書館蔵

■表紙下図 「北海道歴検図」北海道大学附属図書館北方資料室蔵

協力／(社)北海道海事広報協会





海からの視点・ふるさと二〇〇年



小樽港にて 小樽市博物館 奥山コレクション



品が本州社会と結び、西廻り海運が飛躍的に伸展すると共に、松前や箱館を拠点とする海運は、北海道の主に太平洋岸に太く伸びました。道南松前地から、内浦湾、日高海岸、釧路、厚岸、それから千島列島まで、日本海につながる北前船流通が、北の各地の繁栄を築いていくことになりました。



小樽港に集まつた北前船 小樽市博物館蔵

せんごくづ 沖の白帆は千石積みの北前船

大阪や瀬戸内では日本海のことを北前と表現しました。だから西廻り日本海航路の運送船は北前船。定義には細かい違いもありますが、「北前船」とは北海道と大阪を日本海廻りで往復する航路で、さらに寄港する各地で積荷を売り、また仕入を繰り返す船と言えます。地方により、「バイ船」「ペザイ船」「ベンザイ」とも呼ばれました。さて、北前船は18世紀中ごろから活躍するようになりました。それまでの各地の沿岸物流の船より、北前船は船体が堅牢で帆走能力にすぐれ、航路は基本的に大阪を出て瀬戸内海を南下、下関から日本海に出て、各地に寄港しつつ北上をつづけ、やがて蝦夷松前を北の拠点とするようになりました。時代が進むにつれ船の能力はさらに高まり、沿岸の寄港地は発展し、物の流れも大量加速していきました。北海道をめざす下り船はコメ、北海道からの上り船はニシンが代表的で、しかし北前船は各地が必要とするあらゆる物流や商品を買い付け販売しながら往来を繰り返しました。いまの感覚からすると、船が「海路の総合商社」のようなものでした。この北前船群がやがて様似のエンルム岬をめざし、わたしたちの港へ出入りするようになっていきます。



「北海道歴史図」北海道大学附属図書館北方資料室蔵

Kitamaebune.

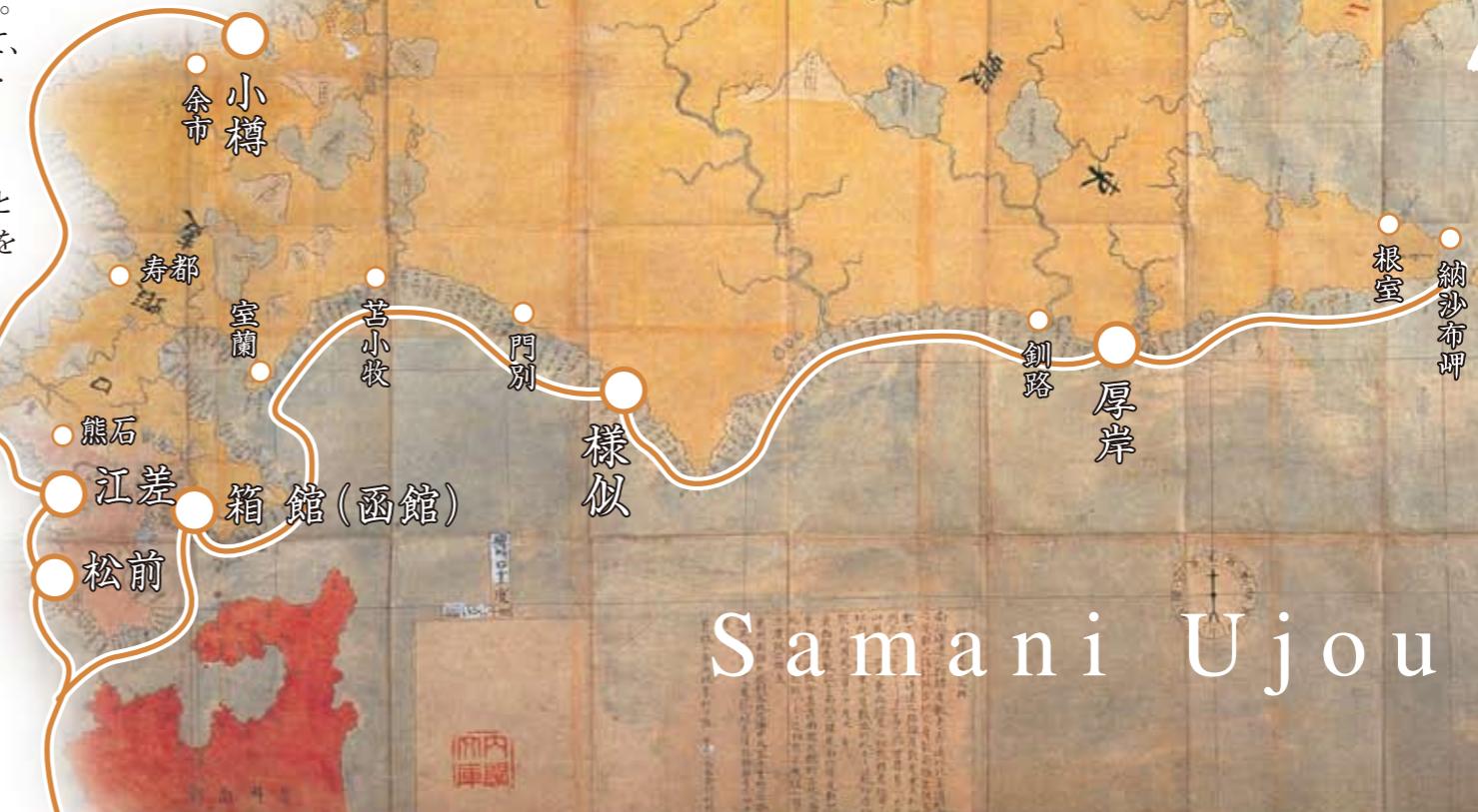
日本海の風に乗って。近世物流路がもたらした広域交流と北の繁栄。

近世、特に江戸時代の後半は全国各地で地域の特産物が製造され、それが商品として各地に運ばれるようになりました。商品

経済と物流の時代が本格化しました。物流はそれまでの陸路に加え、海路が求められるようになりました。大量な産物や商品を一度に運べる船と航路の時代がいっきにやってきました。

江戸・大阪間の「南航路」を先導として、やがて本州海岸線の北の太平洋岸をめぐる「東廻り海運」と、瀬戸内海から日本海へ出て沿岸を北上する「西廻り海運」が発達してきました。幕府は江戸と蝦夷地をむすぶ航路を開設し、日本海岸を伝う西廻り海運はやがて、当時の蝦夷地、北海道に達し日本社会の物流は豊かな北

方の幸と出会いました。北海道の海産物や特産品が本州社会と結び、西廻り海運が飛躍的に伸展すると共に、松前や箱館を拠点とする海運は、北海道の主に太平洋岸に太く伸びました。道南松前地から、内浦湾、日高海岸、釧路、厚岸、それから千島列島まで、日本海につながる北前船流通が、北の各地の繁栄を築いていくことになりました。



Samani Ujou

人物列伝1 「北方歴史の創造者」巨人・高田屋嘉兵衛

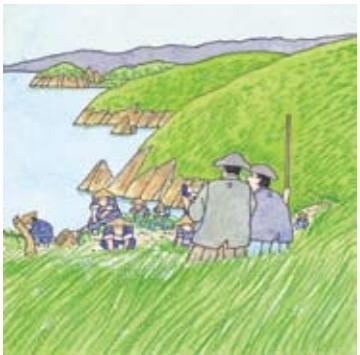
たかだやかへえ

Kahei Takadaya.

後世の人びとは海の大商人高田屋嘉兵衛のことをさまざまに想い描きます。若いころからは「豪胆なる航海者」、北前船で商売を拡大していくころは「組織づくりの名将」、また後半の国際的活躍には「人間魅力の大器」などと評価されていますが、幕末期蝦夷地、北海道の過去を視点とすれば、嘉兵衛の活躍はまさに北方の歴史そのものを創造した人物、と見ることができます。それほど大きい嘉兵衛は、淡路島(兵庫県)に生まれ、兵庫にて水主(船乗り)になります。2年後には早くも船頭。その後、南下するロシアと幕府直轄地の東蝦夷地(太平洋岸一帯)の間で、国際的な緊張が高まり、1811(文化8)年、ロシア軍艦ディアナ号がクナリニに来航した際、幕府は艦長ゴローニンら8名を捕らえ、ロシアはその報復に嘉兵衛ら5名の船をカムチャッカに連行します。のち、嘉兵衛の人間性が称賛されるロシアとの交渉、やがて交流のきっかけとなります。一代の海の英傑、嘉兵衛59歳で永眠、かれの像は海の見おろせる函館の一隅にいまも建ちづけられています。



中村小市郎が開削する様似山道風景



日高沿岸ニ良港アリ。「神々の国」ダ様似。 ここにふるさと物産と人びとの集結。

S a m a n i U j o u



「東蝦夷図巻 乾」北海道大学附属図書館北方資料室蔵

様似町の町章はエンルム岬を中心にして東に大港、西に小港を抱く姿をかたどっています。岬の存在が風をやわらげ、出船、入船を見守る地形。帆船が海を駆けていた江戸時代などはまさに日高沿岸の良港であったわけです。

北海道の内陸やオホーツク沿岸などに比べ、太平洋岸、東蝦夷地と呼ばれていた地方はず

いぶん早くから人びとの生活圏でした。様似町では1635(寛永12)年に運別(西様似)の東金山で金採掘が行われ、その沿岸に繁華な部落が形成されていたと記録されています。こうして、安住やがて小社会となった様似は、地の利を得た良港として海の物流時代と出会います。東蝦夷地の勃興。1799(寛政11)年、エンルム



「東蝦夷夜話 中」より 北海道大学附属図書館北方資料室蔵

地域社会の中心 会所のある風景

明治以前の北海道。江戸幕藩体制の時代の北海道はコメの取穫が無く、松前藩は全国唯一の「無石の藩」でした。コメの替わりに海産物や特産品。松前藩は独特な「場所請負」という制度の元、道内の主要地は、その他の運営を特定な商人にまかせました。その地域には運営をおこなう施設があり「運上屋」と呼ばれました。「運上屋」は地域物産の集荷や販売を中心にやがて多用な役割を果たすようになっていました。

幕末の激動期、江戸幕府は松前藩に替わって東蝦夷地を支配し、「直捌」と言われる直接経営をめざすようになりました。それまでの場所請負人の出張り、「運上屋」を「会所」と言うようになりました。会所は場所請負人が派遣した人びとが支配人以下の組織をつけて運営されました。この会所組織は場所請負人経済の支店や出張所といった面だけでなく、地域の中心的な施設として存在し、人びとの往来など交流や文化活動の中心であつたりしていたようです。会所の置かれている様似の社会、その充実ぶりがやがて蝦夷三官寺等渾院の創建にも関わってきます。



Kaisyo.

人物列伝 2

「様似山道」開削 行動派・中村小市郎

太平洋岸日高地方の拠点、シマニア会所(様似)が幕府によって設定されるとその初代詰合(責任者)に中村小市郎が赴任しました。かれはその以前の1785(天明5)年、幕府の蝦夷地調査隊に従って国後島まで往復、翌6年にはウルップ島へと様似を通過しています。その知った様似へ赴任。小市郎はただちに様似山道の開削工事を企画し、現場責任者となっています。会所の詰合は2年間この地を訪れる多くの人びと、たとえば測量の伊能忠敬一行などを迎えて親交を深めました。詰合の任期を終えると、小市郎は1801(享和元)年、ふたたび幕府からカラフト検分の命を受け、カラフト東ナイツまで検分。行動的な人生を貫きました。

小市郎、下関國(群馬県)益子村の出身。1810(文化7)年、享年56歳で病死し現在は東京都牛込の松源寺に永眠しています。



Nakamura Koichirou.

人物列伝 3

「最初の移住者」地蔵となった斎藤和助

「この良港の地をもっと人間的なふるさとにしたい」とがんばった。もし和助に聞けば、かれは自分の人生をそう答えたはずです。和助は、中村小市郎が責任者となって始めた様似山道開削工事だけわのころ、南部(現東北地方)からやってきました。そして誠心誠意、山道開削を手伝つたり旅人の利便を図つたりしました。地域の雑事にも協力、その人柄や献身的な姿はやがて地域の人々から絶大な信頼を寄せられました。人間社会ふるさと様似。この先人は91歳で天寿を全うしましたがかれの人徳はなお語られ、その遺徳をたたえたため、様似場所請負人・福島屋善四郎らが和助本人を「和助地蔵」として建立しました。人びとの感謝が地蔵になった。そうした人物を北海道では他に知りません。現在も幌満地区住民によって毎年例祭が開かれています。



Saitou Wasuke.



護摩堂



北海道東照宮(函館)

江戸時代は鎖国とキリスト教の禁制が社会の根本でした。しかし、18世紀も後半になると、日本列島はさまざまな外国との関わりを持つようになりました。1778(安永7)年、「ロシア船、蝦夷地厚岸に来航」。1792(寛政4)年、「ロシアの使節ラスクマン、根室に来航」。などと蝦夷地とロシアの関係が緊張しつづけました。接近するロシアは千島列島住民にキリスト教を広めています。そうした伝聞があり、また、いよいよ近代的な開拓にむかって太平洋岸、東蝦夷地に集落も増え、

人心の寄りどころも必要とされました。そこで幕府の力を持って寺を創建するという政策を決定しました。国はである仏教を持って地域の人心を掌握する。そのような社会的必要から、幕府は有珠の善光寺、厚岸の国泰寺と共に、当時良港と会所で日高の中心的な位置であった様似に等澍院の建立を決め、1806(文化3)年、オコタヌシ(栄町)に等澍院を建てました。こうして善光寺、等澍院、国泰寺は「蝦夷三官寺」と呼ばれて、その長い寺歴をはじめました。

十万石格大名身分 三官寺御目見得

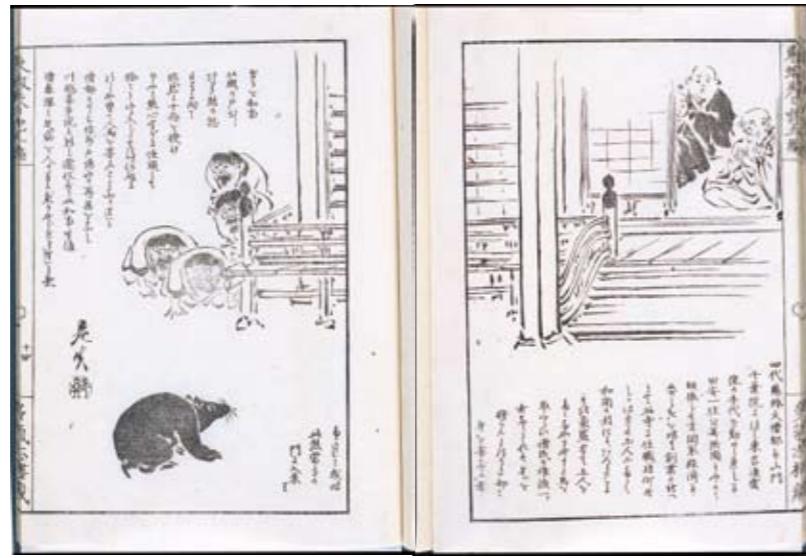
幕末期の幕府財政は非常に厳しい状態にありました。しかし蝦夷地の社会安定と将来のために、幕府はあえて有珠善光寺、様似等澍院、厚岸国泰寺の創建を図りました。世に「蝦夷三官寺」。将軍建立の寺としての格式を保ち、当地での心情的な権威として機能するように、幕府は破格ともいえる礼遇で三寺の存在を世に示す必要がありました。

そこで創建三寺におもむく住職一行は十万石格大名身分として旅を続けたと言われています。また江戸城では将軍御目見得の際、やはり十万石大名格としてその位置が決められていました。こうして寺歴を始めた三寺のひとつ、様似等澍院はまだ高地方の中心地をなしていませんたが、天台宗には欠かせない説法祈祷所が必要であり、箱館奉行にその建立を請願しました。布教による和人の定住とアイヌ民族との和合のために様似に来た秀曉ですが、開山僧としての重責、また前任地千葉県とは厳しさが違う寒冷な日常がわざわいし、まもなく病におかれ念願の護摩堂完成を待たず1807(文化4)年10月11日に42歳で遷化。住職拝命から3年6ヶ月の短い期間でした。



Toujuin.

幕末世相。蝦夷地経営の一端を担つて、幕府創建の「様似等澍院」。 Samani Ujou



松浦武四郎「東蝦夷日誌」より。等澍院に熊が現れたときの様子



薬師如来三尊仏像 江戸時代末期(推定)
●昭和57年10月10日指定 様似町指定文化財

国指定重要文化財



昭和58年 様似町指定文化財
平成17年 国指定重要文化財

等澍院古文書は、開山住職秀曉の選任から11世住職徳弁に至るまで、主に幕府や他の寺とのやりとりについて書かれた文書類である。
住職記13冊と什物張1冊、過去帳(靈簿)1冊が国指定重要文化財、他に書付(寺禄通減法通知書)1通が町指定文化財となっている。



人物列伝 4 百人浜の「一石一字塔」祭主。 等澍院開山の秀曉師。

様似等澍院の開祖秀曉師は1804(文化元)年、寺社奉行から蝦夷地新寺である等澍院の住職を拝命しました。江戸からの道中は大名に準ずる待遇で着任。まずは寺院建立とその後の準備に追われ、そうした日々に、えりも百人浜の「一石一字塔」の建立で祭主を務め、新開地の人びとに供養祭で安心を示しました。

1806(文化3)年9月、オコタヌシ(栄町)に等澍院の本堂が落成し、盛大な落慶法要が行われましたが、天台宗には欠かせない説法祈祷所が必要であり、箱館奉行にその建立を請願しました。布教による和人の定住とアイヌ民族との和合のために様似に来た秀曉ですが、開山僧としての重責、また前任地千葉県とは厳しさが違う寒冷な日常がわざわいし、まもなく病におかれ念願の護摩堂完成を待たず1807(文化4)年10月11日に42歳で遷化。住職拝命から3年6ヶ月の短い期間でした。

人物列伝 5 「馬追い上人」と呼ばれ 「記録」を残した八世・慈真師

慈真師は16歳前後で等澍院に入り、以来3代の住職の元で、13年間も院代(役僧)を務めました。師は若いころから明朗活潑な行動家。住職に代わり勇払(苦小牧)から幌泉(えりも)までを常に馬にまたがってお務めし、人びとから等澍院の「馬追い上人」の愛称で呼ばれました。また馬好きな師は、病気や怪我の馬を治療手当てし、いつか24頭の牧場を成して「牧場の日高」の先駆となったとされています。

さらに慈真師は「記録」を残すことにも大きな功績があり、本山の江戸寛永寺から等澍院記録を書き写したり、厚岸の国泰寺にあった蝦夷三官寺開伝の幕府文書を「蝦夷地寺院一件記」として書き残しています。これらが今日、国の重要文化財になったわけで、師の努力は輝かしく後世につながっています。

院代から住職へ。23年6ヶ月等澍院に在勤した慈真師は、隠居後函館で45歳前後の若さで永眠しています。

Syugyou.

Jishin.